會報

會岳山本日 | 125 | 昭和18年8月

僧嶽紀行

吉澤庄作

僧ケ岳は私の家から眞正面に見える許りでなく、苟も新川郡の人達には何處からでも望まれて、田間に耕す人、田植ゑる人、刈り取る人、新川郡の人には四季を通じて最も親まれてゐる山である。私は今まで四度程登つてゐるが最初の登攀は實に明治二十五年の事で、まだ私の師範學校時代の事であつた。偶々古い頃の何に彼にを調べてゐるとふと出て來たのは次の『僧岳紀行』の一篇であつた。而かも漢文で認めた當時の若かつた頃の作で、今から見ると當時の恩師小杉復堂先生の感化の大なりし事が偲ばれて、我乍ら微笑を禁じ得ざるものがあるのである。

本編は又一面僧岳登山記としては最初のものでもあり、折から登山年譜を講究されてゐる事でもあれば、何かの資料にもともおもはれて、其儘編輯の塚本學兄に送ることゝ致しました。同行者の何れもが今は既に全部故人となつてゐるのも感慨深いものがある。年時の事や地名などには、割註を施して本編を讀む人の對照に便したのも、亦老婆心のあらはれとして諒せられたい。

（昭和十八年七月十一日燈下吉澤生）

僧嶽紀行

無外 吉澤庄作

（明治五年十二月生）

吾越之爲地。山襟廻繞。其可登臨者不爲少。僧嶽亦居其一。余每望之。未嘗不欲一登以探奇勝。而未果也。今玆壬辰（明治二十五年紀元二千五百五十二年）夏八月。偶得暇。因與半田柏之吉澤庄元（櫻井政成亡）倉田恒次郎（諸氏亡）相謀。卜九日。登游焉。

九日。朗晴。下午出家。抵愛本。息一茶店。兩峰峻拔。掠面而相對峙。水流其間。是爲黒部川。架一長橋。今即春所改築。奇巧雖讓前者。亦頗壯觀。水色挼藍。下流渺茫接海。所謂四十八瀬。明滅可見。左折入山。道險惡。晩抵内山村。村以桃有名。投宿田中某。某嘗知余。就而問登岳之路。曰。雪時達岳頂。爲半日之程。然今溪澗雪既融。棘莽鬱茂。叢竹擁蔽。時有惡蛇之加害。非費三日則不得登。衆聽而悚動。余曰死生有命。何以足恐乎。其乃出而傭導。家前山背水。迨夜月出乎東山。松籟與溪水相答。幽絶不可言。

十日。蚤起。推窓天色澄霽。導來。曰德助。壯勇業獵。甚熟於山。某亦從焉。出村地漸高。黒水流于左。連山屏列于右。山水自映發。甚爽快。又老桃往往爲林。花時之盛可想也。一里抵武廼。路岐左右。導曰。右路險而富勝。乃就右。坂路峻險。傴僂而上。稍夷。自是南折。綫路險惡。湯甚。水聲鏘然有脚下。水不可見。稍前。一溪水涸。若道路然。又有一溪。水極清冽。掬飲之。覺神始蘇。復行降谷字奈月谷一巨巖迫溪。可高三丈。下蔽覆爲洞。廣可隱數十人。溪流潺然。激石觸岩。解裝涉水。冷徹神。忘道路之苦。時已加午。餉畢。循溪曲折而進。奇岩怪石。紛錯突出。爭爲奇狀。或如飛。或如舞。或如戰。或如渴而飲。或如疲而臥。三里抵堤河原。薪材重積成山。稍行而得一小屋。寂無人。四壁以茅爲圍。可入十人。内備鍋及爐。側有浴桶。蓋樵夫所宿者。乃喜而投宿。炊米治浴桶。德助採蕗及獨活來。雜而煮之。味極美。浴已就寢。無衾。加爐煙滿屋。煩悶甚。導者不少意。鼻息鼾鼾如雷。少焉月射前峰。怪禽遠叫。極凄絶。半夜寒威大加。被裳而臥。

目次

●僧嶽紀行……吉澤庄作…一頁
●禪僧の旅具……川喜田壯太郎…二
●西北路……兼松學…三
●對山館—思ひ出すことども(一)……西岡一雄…三
●入湯雜感……中村謙…四
●呼石・和尚山・湯岐……行方沼東…五
●黒部源流と双六谷……今川良雄…六
●會員通信—沼倉寬二郎・北田正三 望月達夫・中司文夫……七
●集會記事—第四回有志懇談會・關西支部小集會・關西支部野外研究會……九
●會務報告其他……二

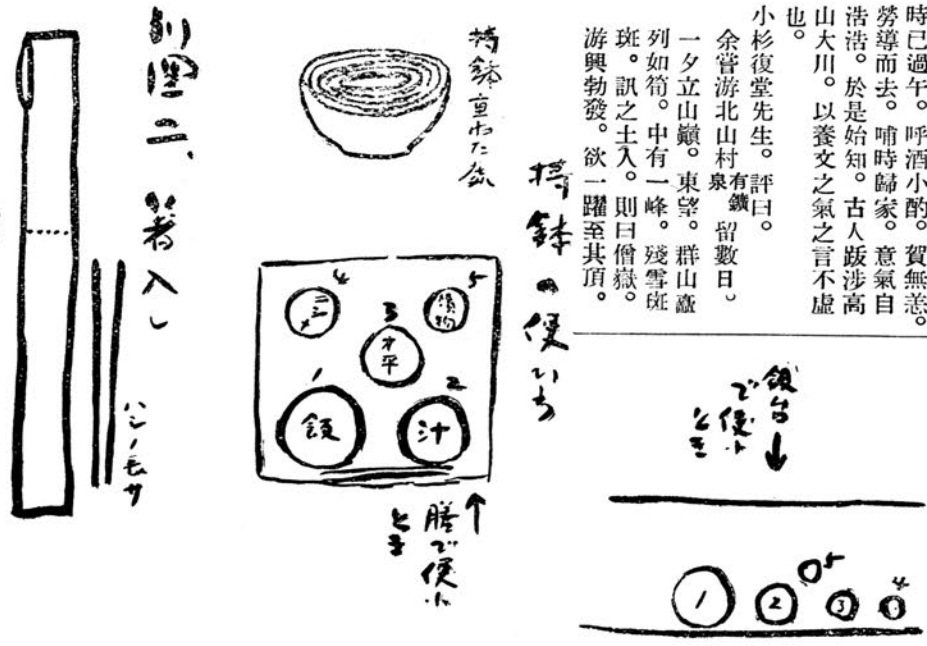
十一日。煙雲浮動。日昇而發。自是無路。東南揭水而進。岩石岧嶢。岸上殘雪爛爛如銀。雪下底接水。漸融而爲洞。步甚危。約三町溪盡。峻崖峭立。攀援而登。絕頂稍平。望一峻峰聳前者。卽僧嶽也。其間有溪。極深窈。稱長谷。魚串而下。白雪皚然。奇寒徹骨。南折沿溪而行。可五町。殘雪斑斑。異花幽草相望。余採異花藏之。欲爲標本也。喫午飯。復溯溪。崎嶇折轉町許。溪始盡。東踰峻崖。叢竹鬱茂。不見曦影。且排且行。手足漸疲。裝亦寸裂。其苦可知也。導者曰。若雪時徒一投足勞而已。殆一時間而出僧嶽之背。回顧所經。不過十間。踏殘雪而進。攀一崖。排一叢而達絕巓。廣袤一萬步許。地呼曰大寺屋敷。相傳往昔巨刹有三。爲上杉氏所亡。往往土成堆。異卉奇草群生而皆不出尺。蓋以風極烈也。導者曰。春時花季。遠望白紫之菊花如敷氈。及近不見之。甚爲奇。殆中央十步許。赭土勞殺。不留一塵。奇石佇立如墓地。稍東北。排一叢而抵小寺屋敷。比大寺屋敷差小。地拔海五千尺許一八五米藉草遠眺。東方連山。起伏如波浪洶涌。層層無際。而有一峻峰。最拔出。勢突九霄者爲大蓮華山白馬岳。地誌云。高一萬尺。洵爲吾州之宗。稍南卽立山。晴雲分明。似與大蓮華山相揖讓。西北則臨海。渺茫無涯。能州諸山一帶。隱見于煙波之間。吾州某川某邑。皆在衽席之下。昔孔聖。登東山而小魯。登泰山而小天下。良有以哉。少時而天煙怪雲掠面而起。凄神慘骨。不可久居。導者曰。人有登此山者。則煙雲必起。吁古刹之靈有所忌而。不欲人之窺其墟邪。余抽筆石背題名。南進抵稍低所。矮松偃松甚多。幹大枝長。東折而行。忽臨斷崖。巨磐相倚。一失脚轢其禍不可測。援岩角而下。約千尺。滿溪皆雪。奇寒泌骨。蜿轉而下。五町達金山谷。地藏銅。工人凡二十。斧鉞丁丁。伐材築舍。欲供採鑛也。問坑口。秘而不言。樸陋可笑。又踰坂下峴。薄暮抵野口谷尾沼自岳谷頂至此。三里而遠。疲甚。就炭竈場。借茅舍宿焉。

十二日。黎明二婦來。爲負炭者。云二時出家。四里始夜明。而重殆二十貫。問其賃。曰。止二十錢。可言能勤。曦昇。謝舍主上途。忽見群猿呦呦遊前嶺。伎甚熟。東北沿溪而下一里許。沿一水而行。是爲十二貫野用水。自是至十二貫野。七里强。道路平坦如砥。經宇奈月谷。三里抵內山村。時已過午。呼酒小酌。賀無恙。勞導而去。哺時歸家。意氣自浩浩。於是始知。古人跋涉高山大川。以養文之氣之言不虛也。

小杉復堂先生。評曰。

余嘗游北山村有鑛泉留數日。一夕立山巔。東望。群山矗列如筍。中有一峰。殘雪斑斑。訊之土人。則曰僧嶽。游興勃發。欲一躍至其頂。以兒女從而已。今此篇叙寫幽奇。無遺。一讀有身游其境之念。

癸巳明治二十六年三月廿日燈下復堂道人識



禪僧の旅具

川喜田壯太郎

何でも、かんでも、國產でなければ御氣に召さぬ御時世、乞食坊主の汚れた風呂敷の中からでも、意外な日本精神の登山具が飛出さないとも限らないと存じ、こゝに、禪僧が托鉢行脚にかついで歩く品々を、書き並べて御高覽に供します。(京都大德寺の一例)

雲水僧托鉢持物

一、自鉢一組(五枚重ねの木製漆塗の椀)

二、箸、箸袋、布製、裏付)

右の二つを重ねてフキンで包む。

三、湯呑(竹製又は木製)自鉢と共に、破損せず、熱湯を入れても熱くならない特長がある。

四、風呂敷(リツクサックの優れた代用品)

五、雨合羽(油紙)

六、毛布(半枚に切つたもの、持ち易いために)

七、着換へ

八、剃刀、砥石、經文

九、ズダ袋(セミリツクと云ふ處か)

十、手拭、紙、紙入等は懐中に入れる。

(上圖のうち持鉢とあるは自鉢の誤りに付訂正す)

西北路

兼松學

一、ビルマルートを皇軍に依つて斷たれた重慶政府の殘る輸血路としてダージリンルート及西北ルートが浮び出て來た。此の二つのルートは一方が古來の天山路であり他の一方は秘境西藏を經由する我等の關心深い路線である點に於て共に注目に價する。支那民族の偉大な土木工事力に依つて改修された之等のルートが來るべき日我が日本人の共榮圈の交通路としてヒマラヤや天山への道と成る事を待望するものであるが、その內西北ルートの一端を此處に紹介する。

二、西北路と云ふと一般的にはソ聯經由の援蔣路を總稱する、このルートを通つてどの位の物資が送られてゐるかと云ふ樣なことは今此處で觸れるべき筋でないから別として、最も近い便宜な路と云へば外蒙から蒙疆を通るルートがあるが現在は支那事變以來、包頭までは皇軍の治下に入り重慶側としては利用の方法が無いので張家口や厚和（綏遠）を通つての古來の道は止められて外蒙のウランバートルから南下して五原から寧夏の方を通つて蘭州へ、或は同じくウランバートルから西南へ下つて、居延（ガシュノール）を廻り額濟納河の流域を經て南下し甘州、涼州から蘭州へぬけるゴビ沙漠縱斷の途があるが、是は途中自動車の使用が極めて困難な箇所がある（ガシュノールから臨水の間）ので駄載の外利用が寡い模樣である。

反之して從來の天山北路經由の途は道路も古來から或程度開けて居り途中のオアシスには水の補給其の他の便もあるので今は專ら此の方に主力が注がれてゐる。

此の途を我が日本人として最初に通つたのは現存の記錄では西本願寺の諸氏で明治三五年から七年にかけて渡邊哲信、堀賢雄、橋瑞超氏等が數回に亘り佛跡の探索を主目的として通つたもので大谷光瑞師の慧眼に依つて派遣されその記錄は永い間公にされないでゐたが數年前「新西域記」（上下二卷）として公にさるゝに至つた。

歐洲人としては有名なスウエン、ヘデイン・オーレ、ルシュタインを始めとしてその前にも後にも多くの人が出て夫々科學的、政治的軍事的、文化的な目的を以て所屬の國家から手厚い保護を受け乍ら現地の實情を具に研究紹介したが更に溯つてはマルコポーロの旅行あり、又その以前は絹の道として東西交通の要路であつたことは忘れられない事實である。

三、現在のルートはソ領中亞のセミパラチンスクからソ支國境の塔城を通りウルムチ（迪化）からハミ（哈密）を通り星々峽から長城外側に沿ふて東南に來り肅州、甘州を經て甘肅省の蘭州に至る途が最も主なもので蘭州から哈密に至る區間の約半分は瓦で舖裝され、其の他の區間は舖裝は無くとも自動車の通行に支障の無い草地であるので此の途は今や相當完備された沙漠路と成つてゐる。

支那とこの新疆との間に始めて自動車に依る交通を開いたのは一九三三年（昭和八年）新綏汽車公司が綏遠哈密間及蘭州哈密間に主としてフォードのトラックを用ひて支那人の企業として行はれた。當時新疆は既にソ聯の勢力下に在つて、新綏汽車公司（汽車とは支那では自動車のこと）の當初の理想であるウルムチや、カシュガル行は實現しなかつたが、とまれこの支那人の私企業として始められた長距離自動車路が今や重慶のか細い輸血路として强化されたことは興味深い事實である。（昭和一二年以後此の事業は中止されて車輛は援蔣輸送に充當された）この途が再び共榮圈の途として役立つ日を待望するものである。

對山館ー思ひ出すことども（一）

西岡一雄

對山館がいよ〳〵廢業したといふしらせを百瀨から請取つたとき、或はといふ豫感がせぬでもなかつたが、くるものが遂にきたかといふホット安心した意中にも何だか一抹消し難き淋しい氣持がした。

豫感といふのは、今日からは既に數年以前の夏、例によりこの宿に草鞋の紐を解いたとき、家の容子に締りを失ひ、シックリした落付きがうせ雜然たる寄世帶のやうな感じがしたのは、もう其の頃に生一本の山の宿としての從來の面目を維持し難くしてアパート式にならざるを得なかつたのであつたでなからうか、といふのは、大町は依然として針ノ木、烏帽子方面へ這入る登山者の關門として山の町としての面目はその儘あるとしても、山小舍の增設と發達、自働車電車の交通機關の便とは、爰からする登山者の足をさきへ〳〵とひきつけるので、大町あたりでゆる〳〵と先づ山を一通り觀賞して案內人を呼び寄せ一緒にプランを悠々錬る等といふ餘裕も悠長さも登山家氣質から全く消えてしまつて、只管に前途をいそぐものから、宿としての對山館は昔のやうな重要性を失つて衰微に傾くのは止むを得なかつたことのやうである。そのために純一な宿屋渡世だけではこの大廈をさゝへ生活をしてゆくのは並大抵ではなかつたらしい。それでもこの長い間の傳統と輝しい歷史との誇りをどうかして保つべく百瀨君等は百方苦慮奮闘したことには同情されるが、事遂に今日に至つてはもう施すに術もなく廢業と迄なつたのであらうが、自分は自分達が多年培ひ生かせ折角今日に迄なし來つた吾が好日山莊が丁度この百瀨君の對山館に於ける運命と歷史とによく肖てをり同じやうな經路にあるを以て心から自分はこの對山館といふ憧憬の名を惜しまれてならない。

山の町にふさはしい名の大町に對山館といふ宿屋があつて、そこの主人は昔ながらに尊敬すべき山の先輩であり又親切な宿の家長として善く馨き渡つたその對山館が遂に御時世の波に押し流されて爰に沒落　再び甦らざるものと思へば、あの古雅にして堂々たる山の一流旅舍としての代表的風格を存

し、日本アルプス登山發達史の重要なる役割をもつた對山館なるものに今更一應の感謝と綿々たる追憶の情念の湧くを覺ゆるのは、かの若山牧水氏であつたか、古くして亡びしものは美しき哉といつた感情のみであらうか。

信濃大町と對遮的山の町をなす飛騨の高山にも木曾の福島にも數多の旅宿はあるが實際に於てこの對山館の如き雰圍氣と面目とをもつた宿屋は一軒もないのである。今後或は上河内にある帝國ホテル又は清水屋のやうな宿屋は建つにしても再びこんなにガツチリと組んだしかも風土との調和を快く表顯した氣分の對山館の如き旅宿は永久に見られないかも知れないことを想ふと餘計に惜しまれてならぬ。

私が爰に御世話になつたことは數度しかないが、始めて草鞋をぬぎ、盥に足を漱いで三階に通されたのは、去る大正十一年七月のことゝ覺へる。爰に今は亡き玉作等を招き、烏帽子、槍、穗高一週間の縱走の山旅を相談したのであつた。その時乘ねて聽く有名なる對山館に一夜を明かし、まだうら若かりし獨眼烟々たる愼太郎氏の風貌に接して、山の初心者たる吾等は唯に畏敬の念に押されてこの先輩の說にきゝ入つたのであつた。

夕、この家の露臺に立つて沈みゆく落日が西の空を紅に染むるときの遙かに蓮華、針ノ木、餓鬼岳あたりの山々を指し教へられ、明朝さしてゆく高瀨谷から龍川あたり、地圖上ではなく實際に初めて遠望し感激の數刻をこの露臺に佇みすごした尊き記憶が今にある。明治四十一年不二登山で一度は體驗してゐた筈の夏雪ではあつたが、それから既に十幾年の歲月をへた今再び仰ぐいく條かの雪渓を蓋々一萬尺の高峯に見たとき心に緊張を覺へ皆は片づを呑んだ。それ以來、いつのときでも登山學の第一課は、先づこゝの露臺に若き岳徒を並べて、百瀨君が私等に示したやうに必ず西空を指し一々山々を指呼して北アルプス東面の概念を植えつけるに力めた。昨夏神一中生を北葛澤に伴つたときも、同じこの露臺に立つて、くれゆく茜色が美しく燃ゆる後立一連の山々、北葛、七倉の源流を指しては先づその登高欲を煽つたのであつた。早曉またもやそこに人々を率いて朝日をうけて赫突と眞紅に染まる蓮華岳の腹を遠望しては曾遊の北葛澤を說いた。從つてこの露臺は對山館の中でも一番私に馴染深いものであつた。

對山館についてもう一つの記憶は、帳場の眉間にかゝる石川千代松博士の肖像でもなく、石川欣一氏と愼太郎氏との交友の深さを知るといふことでもなく、茨木猪之吉氏に敎へられた何とかいふ鄕土の畵家がのこしたといふ日本畵が二階の常に私が占める部屋に掲つてゐるといふその畵でもなく、實は愼太郎氏がその烟々たる獨眼を光らせて玄關口に淨机を控え、その机上に數册の愛書を重ね靜座して團扇をつかふその姿である。夏のことゝて白い浴衣をきてゐる。これが如何にもこの建物と人々がよく調和して百瀨君らしき風格を高めてゐるかのやうにおもふ。表構へは勿論、玄關先きと、高い天井を仰いで上る二階への登り口、それに表三階に高く對山館と肉太に書かれた書體にもこの宿の特色はあつた。自分が常に通される部屋は二つしかない、一つは三階表の間、爰で冬炬燵に足をのばして石川欣一氏と酒をくんだ。爰で又榎谷徹藏氏と朝食を共にしたことがある。一つは前記の二階西端裏庭に面した暗い部屋であるが、一番奥まつて靜かであるが、どうかすると二階下の便所の臭氣が忍びよつて惱むことがあつた。

現在の登山家の多くは或は對山館といふ名すら知らず、譽ひ知るにしても素通りして一宿の緣なき人が多數であると思ふが、少くとも大正の登山者達は、先づ爰に一度荷を下し靴の紐を解き、晩餐が濟むと打連れて市場に食糧を捜し求め、夜は卓上に地圖をひろげて案內人を交へて案を練つたがために、殆んど總ての登山家はこの家に一宿の機緣を結ぶことを樂しみにした模樣である。それに鐵路は大町で切れて四谷迄のびてをらなかつたから、かた〳〵白馬を目指す登山客と雖も先づ食事だけでも對山館に立寄つて濟ませてさてといふ人が多數であつたから、大町の重要性は今に增し從つて對山館はなくてならぬ嚴たる存在であつたことゝ考へる。さればこそ、他にはなくあんな立派な堂々三層樓しかも嫌味のない山の風格を反影したやうなものが出來たことゝ信ずる。山の古典をよむと、どの紀行文にもこの對山館の名が出てくる。登山者は山の名と共に自然にこの宿の名を會得してゐたのであつた。地方的には、奈良井の越後屋、松本の飯田屋、藪原の米屋とかいふ名は聞えてゐても、全國的に登山家仲間にかくも籍甚した對山館の如きは他につもない。それが今御時世とはいへ忽然として廢業の悲報に接したのであるからこれに一宿の機緣をつなぐ人々には多少の感慨を催さずにはをられぬであらう。

少くとも仰山な云ひ草であるかも知れぬが、昔に於てあこがれて山に入る連中が、この信濃大町に來り對山館に足を洗つたことは、聖地を巡禮する信徒達が由緖深き佛閣に辿りつき感慨にひたつたのと少しはそれに肖た心持ちの動きがあつたかのやうに思はれる。無論信仰を絶對の對象とする名刹と營利を主とする旅宿とは同一に見られない迄も少くても人々は、この地この宿で何かを學び何かをうけ入れようと努力する氣持位はもつてゐたことのやうに考へられてならぬ。かういふ氣分は對山館に於て一たとへ他の地方の宿に於てもあるとしても—特に著しい。

思へば宿屋の主人らしからぬ百瀨君であつたがために對山館は遂に廢業するに至つたのかも知れない。しかし又それがために對山館の名聲が頓に拡つたとも見られないだらうか、私は自分達の身につまされて、その得失を論ずる資格はないが、只管に惜しく、のこせるものならば是非のこしたいと思はざるを得ぬ。

（十八年七月十八日）

入湯雜感

中村謙

この度偶々草津へ立ち寄つたのを機會に、草津スキークラブの方

々と一夕懇談いたし入湯に關する色々な御意見を伺ふことが出來たので愚見を加へて諸賢の御參考に供して見たいと思ふ。

一、効能は時代と共にかはる

温泉の主成分が一定してゐる以上、その病氣に及ぼす効能も時代を超絶してゐるかと思へば必ずしもさうではない。例へば草津温泉と云へば我々は常識的に「あーあの方面か」と合點するだらうが、昔からの文獻を調べて見ると驚く勿れ！その變遷のあまりにも激しいのには誰れしも驚異の眼をみはらぬものはなからう。

草津の歴史を繙くと、その濫觴は今を遡ること一千八百年前、景行天皇の御宇に日本武尊の發見とも云ひ、或は一千二百年前僧の行基が開湯したとも傳へられてゐる。いづれにしても一千年以上の古い歴史をもつてゐること丈けは確かだ。ところで其當時は何病に特効があるといはれたかと云へば、若返り、不老長壽が一枚看板であつた。それが戰國時代にうつると金瘡・外瘡・打撲症に効く温泉と稱へられ、元祿時代には「色の白くなること白玉の如し」と美人になる湯になり、更に文化文政から明治十二年頃までは瘡毒・梅毒等に特効があり、明治の中葉から大正にかけては專ら淋毒、下つて大正末期より昭和にかけては神經系統の諸病に効く温泉と唱へられてゐる。これは決して地元の宣傳に依つて斯く變遷したのではなく、湯治者の體驗を通じて口から口へ傳へられて、いつの間にか變つてしまふのである。よくその時代の特色と病氣とを睨み合せて見るときに如何にも面白い變遷ではないか。愚考するにこの現象は必ずしも何處の温泉にも共通に云へると云ふのではなく、草津温泉の如き四百四病に効く温泉にして初めて云ひうるのではあるまいか。何病にも効果覿面なるが故に、その時代に最も多い病氣、一般の人々が最も惱む病氣に最も効くといふことになるのではあるまいか。兎も角もこの話は我々の温泉に關する常識に一大示唆を與へるものがあると云へよう。

二、温泉は强いところを强くする

我々が入湯に出懸けるのは、病を癒すが爲めであるとは誰れしも考へるところであるが、豈に計らん、温泉はそれのみか、强いところをより强くすることに依つて病弱な部分を漸次に驅逐する作用の方がより大であると考へた方が適切である。斯ういふ考へ方から治し切るまで入湯するといふ從來の考へ方を一擲して長くとも三七廿一日で打ち切り、又翌年入湯に來るといふことにした方が効果的である。ある老媼があつた。腰が立たぬので草津へやつて來て永い間逗留して癒さうとしたがどうしても癒らず、諦めて歸鄉してしまつたが、それから僅かばかりの日子ではあるが、毎年入湯に來るやうになつて何時の間にか腰が立つやうになつた話もあるし、第四期の腦梅毒患者が以上の方法に依つて完全に癒つた例もあるといふ。この見方なども大いに參考とするに足ると思ふ。

三、入湯は仕事の能率を高める

温泉を利用するのは病弱者ばかりではなく、丈夫な者も大いに之を利用して仕事の能率を高めて頂き度い。だが從來の如く温泉場を慰安所と考へ、遊び場と考へることと丈けは絶體にやめて頂き度いといふ僕一流の入湯に關する信念を縷々お話したところ、積極的に温泉を利用してゐる一例として斯んなお話を承つた。

第一は房州の網且那の例である。毎年十日位づつ家の子郎黨を引きつれて入湯にやつて來るのだが、來ると來ないとでは歸鄉後仕事の能率は非常に違ふといふ。

次に農家の人々であるが、この人達は農閑期を見計つて毎年十日乃至三週間つゞけて湯治にやつて來るが、病氣の有無は別として、歸鄉後の効果は著しいものがあるといふ。

四、カケ湯は効果的ならず

時間湯の効能について色々承つたが、その揚句「温泉の處女性」について强調されたことは全く感銘を深くするものがあつた。即ち温泉もカケ湯ではいけない。地面から直接ゴブ〳〵と湧いて來るのでなくては効果が薄いことや、人の澤山入つたあとは矢張り効果的でないといふのである。草津には時間湯が五つあるが、その中カケ湯が二つある。これ等は理想的に云ふと當然改善さるべきだ。又時間の前後一般に開放しない湯が一つあるが、五つが五つとも斯ういふ風に改むべきだと思ふ。いづれにしても温泉はその處女性を保たせる爲めに設備の上に於ても、入浴の方法についても、最つともつと細密なる注意が拂はれなければならないといふのが結論である。

以上は全く耳學問のうけ賣りに過ぎないが、心ある人々には非常に參考になる節々が多々あると思ふので貴重な紙面の一部をかりて御知らせする次第であります。

呼石・和尚山・湯岐（ユノマタ）

行方沼東

常陸の國の最北端に南延してゐる阿武隈高原に和尚山（八〇四M）花園山（八〇二M）猿ケ城（八八一M）（ェーゾーモロ）八八〇M・八七四M・等の一山塊があつて四時川（鮫川の支流）、花園川、大北川の水源をなしてゐる。磐城塙から西へ久慈川の支流川上川について關本に通ずる山路は古くからの常磐横斷道路で昔勤王家小松氏の通つたところといふ。今でもこの阿武隈の高原散村を驛絡する唯一の街道で福島側は笹原村呼石までトラックが通つてゐる。茨城側も花園山の下あたり迄は立派な道路が開發せられてゐるといふことだ。川上川の花崗岩の谷は川上の村を離れて間もなく峽間となり大巖に入つては殆と道路と同位となる。大巖から下り藤（サガ）に至る約五キロの間にはあまり世に知られない美しい溪流の連續が見られる。唯惜むらくはこの附近の山林が既に伐採せられたので林相の見るべきものなく溪流と森林との對照に缺けてゐることであるがそれでも紅葉期には一段と美しい景觀がくり擴げられるだらうと思ふ。溪側にはイタヤカヘデ、カツラ、ミツデカヘデ等の紅葉樹種を認めた。バイケイサウが咲いてゐるのや日影の岩の上にはヤシャゼンマイがさわやかに葉を擴げてゐるのを見た。私は呼石といふ磐城塙から二〇キロ程奥の山村に住む舊友を訪ねて行つ

たのであるがその邊は標高凡そ六五〇M位の地點で如何にも阿武隈の代表的な高原であると思はれた。樹相といへばクリ、ナラ、ミヅナラ、カシハ等殆ど全部といつてよい程の濶葉樹であつて里近いあたりではどれもこれも皆若木ばかりだ。この雜木林で鶯や時鳥をはじめいろ〳〵の小鳥が囀つてゐる。また白樺が林の間に入り交つてゐるが、しかもそれが高山のやうに乾燥した感じのしない水々しさをもつてゐるのが特に目立つてゐた。

山道に沿ふて至るところに樹枝を利用したY型の馬止め柵が廻してあつて毛並のつや〳〵した馬が放牧されてゐた。丘と丘との間にはきまつて小さい濕原がありヤマドリゼンマイの群落に出會つた。

呼石から國境を越えて山小川に下り四時川の橋を渡つて突き當りの曲り角に南、才丸、花園、關本行の指導標が建つてゐる。和尙山へはその道と別れて李の木のあるところから眞直に細道に入る。すぐ右側に農家があつてその庭の端を通るのである。少し登ると樅の殘つてゐる尾根に出るエンレイサウやヤマシャクヤクの間をわけてゆくと更に左へ森林の切り開きとなるのでその中を登る。頂上に近づくに從つて急登すれば三、四〇分で頂に出られる。そこには和尙を刻んだ石の祠が一つ草付の中に祀つてある。周圍は落葉松、ヤマボウシ等の繁茂で全く眺望はさへぎられて仕舞つてゐる。樹の上に登つてみると南に近く花園、猿ケ城が深い澤を抱いて重り合つてゐるし北に三株東に遠い佛具西には八溝の連嶺が見られる。歸りは急坂をかけ下りたので指導標のところまで二十五分で下つた。呼石から鳩の宮を經て凡そ三時間を要した。

那倉から川上川の橋を渡り松塚を經て東南に山路を辿り國境を越えて柳澤に出られる。柳澤から猿ケ城（八八一M）や八七四M、八一七Mにゆくことが出來るそうである。勿論花園山へはそこからゆける。片貝から畑畑を通つて柳澤に這入るよい道もある。この道は木炭運搬のためにトラックが餘程奥までゆくそうである。柳澤附近には天狗の鼻といはれる巨大な岩等もあつて厚生林の樹幹にはイハオモダカやホテイシダが着生してゐるとは炭燒に通ふ村人の話であつた。

歸路那倉から西南に八キロの高原をよぎつて片貝に出て湯岐温泉に宿つた。湯岐は川上川の支流に沿つた崖の上にある山の湯である。三四軒の湯宿が八幡神社の杉森の下に固つてゐる。中に泉やといふのが一番大きい。那須や八溝が望めるといふことだ。そこから一寸川上の道のへりに大船館といふ新らしい宿屋が二年前から開業した。私はその釣しランプの宿に泊つたが閑寂この上もないところであつた。宿の近くには小さい乍らも瀧なぞがあり前を流れてゐる溪流は山女（セヤメ）の釣り場として名高いそうだ。湯はアルカリ含有泉らしくつるつる滑らかである。低温のために加熱してゐるが中氣に効くといふことであつた。湯岐から川沿ひに八キロ下ると磐城塙に出られるし、弘法山（五四一M）から伸びてゐる尾根を西に六キロ程下ると水郡線の東館驛に出られる。これらの山路で眼にとまつた羊齒はイヌワラビ、ヘビノネゴザ、ヒメシダ、カウヤワラビ、イヌガンソク、クサソテツ、ワウレンシダ、キノデ、ワラビ、ゼンマイ、ヤマドリゼンマイ、ヤシャゼンマイ、シシガシラ、ミヤマクマワラビ、ジユウモンジシダ、シノブ、ホテイシダ、クジヤクシダ、ミゾシダ等であつた。

（五萬　小川、塙、二〇萬　白河、參照）

黒部源流と双六谷

今川良雄

七月十五日（晴）大町六・四〇—濁—鳥帽子三・一〇

濁小屋は無人山上はガス深く僅かに藥師の白き山肌の隱見するのみ氣候不順の爲殘雪多く心地良き天幕の一夜。

十六日（晴・雨）天幕　四・三〇—五・〇〇烏帽子岳—天幕七・〇〇—三岳—野口五郎　一・〇〇水昌小屋　一・四〇—四・三〇黒部源流祖父澤出合（天幕）

澤へ入つて間もなく降られ天幕を覆つて雪渓を降る陰鬱な氣持、祖父澤出合の草地に天幕を張る。夕餉の仕度最中止んで居た雨が相當猛烈に降る、樂しみにして居た岩魚釣もお流れ、疲れた身體にうどんを啜り込む頃雨は止んで美しい虹が掛る、雨の爲少々冷るが黒部五郎を眞上に見る居心地の良い草原だ、月明りにランタンも不用澤音を聞き乍ら深々と眠り込む。

十七日（晴）天幕（七・五〇）—一一・四〇　藥師澤出合　一二・一〇—四・〇〇太郎山—七・〇〇上ノ俣・黒部五郎鞍部（天幕）

祖父澤まで來るともう雪もなく澤は相當の水量となる、釣師が入るので所々右岸に道を切つてあるが大體に於て澤通し。下手な岩魚釣は忽ちにして針を三つ共岩に喰はれ釣を斷念、でも枝澤の淺みに游泳して居るヤツをビツケルで殴り捕えたり又手摑みにしたり、流石に岩魚の巢だと感心する。藥師澤出合邊りは徒渉も膝までである、下流はもう足も出ない、此處より太郎山へ拔ける事にして山道に入る、笹原の高原を登る事久し再び澤に入る、本流以上に惡く何度も高巻をやる、ソロ〳〵雪が現はれると間もなく廣い草原だ、雪解の小流と偃松群と笹原の雄大なスロープ、ローンスキーでも遊び度き思ひ。澤の上流二俣の左を登る、太郎と上ノ俣の鞍部へ出た心算だが上はガスに包まれて居て充分判明せず大分上ノ俣寄りであつやうに思はれる。少々屁張つたので泊場にし度く思ひつゝ頑張つて黒部五郎鞍部の笹の庵に寢る。天幕を張り終る。とグツタリ延びて暮れた山々の起伏を力なく眺む。粥食を無理に流し込んでシュラーフにもぐり込んだ時は黒部五郎の眞上に滿月が美しく照り暫く月見と洒落れる、風は相當強く夜通しテントははためいて居た。

十八日（晴）天幕七・五〇—八・五〇黒部五郎岳　九・一〇—一〇・一五五五郎小屋　一二・〇〇—二・一五蓮華二・三〇—双六池　四・〇〇（天幕）

冷藏庫の岩魚を燒いて久し振に食欲のある食事をやる、今日も好晴に惠まれ黒部五郎の大觀は素晴らしい、槍は其の名の如く穗先を尖らせ穗高北鎌と競ひ立つて居る、

遠く白山はまだ眞白だ思出多き山々の如何に印象的なる事よ!! 無人の五郎小屋で京大旅行部の田中君に遭ひ懐かしい關西の山話に思出を新たにする、支へ棒も折れ揃り傾斜して居るこの小屋は元來避難小屋の目的を以て建てられたのではあるまいか、それにしても指標の『黒部川、鐘釣温泉方面』のペンキ文字はハイキングコースの導標の様な氣がして苦しい笑ひが洩れる。双六池は半ば雪に埋れて居り笠・拔戸の投影が美くしい、池畔の砂場に天幕を張る、豪勢なキヤムプサイトだ。小屋は二階建の堂々たるもので五人の山客が廣い二階の中央にポツンと寢轉んで居る小屋で双六谷の様子を聞くが蒲田の連中だから誰も知らない、天候も少々怪しくなり無味な東風と曇つた温かい雰模様を氣にし乍ら明日の難コースを氣遣ひ乍ら夢路を辿る。

十九日(晴・小雨)天幕六・〇〇—一〇・三〇—蓮華澤出合八・〇〇—打込谷(天幕)

槍へ向ふ田中君等が元氣にヤツホツホーを叫び乍ら登つて行く、どうも雲行が面白くないが出發と定める。一時間位は辛くも道を踏めるが下生えに埋れて居て非常に歩き難い、右岸から出る大きな澤から道は左岸に移る、消えた道を求め乍ら、或は谷通しに、崩れも相當あり早くも難行。銃目を拾つて歩くも古く黒いので仲々容易でない蓮華澤を過ぎると水量も多く徒渉も大變だ、ロープで辛くも通過したり急崖を危く攀ぢたり重い荷物に苦しみ乍ら銃目を見付ける毎に手を合はさんばかりに嬉ぶ。打込谷上流廊下狀は隨分高巻く、水もなく苦しい登行、大體双六谷は右岸に澤多く左岸は少なく殊にこの邊りでは全々澗澤二三あるのみ、徒渉と雨と汗と更に谷で二回轉んだので全身ズブ濡れ、一歩々々足探りに打込谷へ飛降りたのはもう八時。疲れ切つた身體にランタン頼りの薪拾ひは實に辛い、岩へ天幕を渡して衣替を終るともう動けない、お粥を流し込みシュラーフにもぐつた頃は半ば眠つて居た様だ。

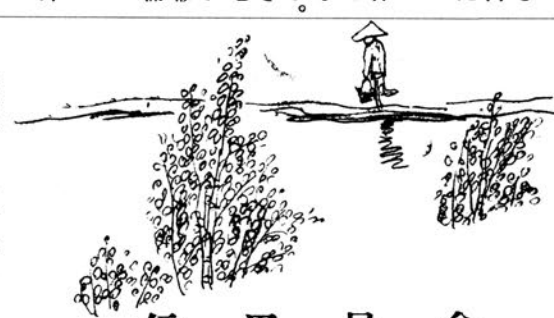
二十日(曇・雨)天幕六・〇〇—七・吊〇〇橋七・三〇レール—九・三〇廣河原—一〇・〇〇中ノ俣澤事務所一一・三〇—三・一〇双六橋(バス)

昨日の難行で衣は破れ手足は小傷だらけ、何となし身體に生氣がない、昨日遅く着いたので見えなかつたがすぐ上流に籠渡しがある、滑車が錆びて居るので仲々重い、兩手で力一杯漸く對岸に渡る、何回となく徒渉した身に之は不用に思えた。更にグン〳〵尾根を登る、小尾根を一つ越すと『打込谷官行人夫小屋』がある、ピラミツト型の堀立小屋で道は其の中を通つて居る、この邊りから道も判然とついてありやつと開放された氣持だ、昨日一時間早くばこの小屋まで來られたに…と殘念に思ふ。本流へ降り切ると吊橋だ、中板は全々なく而も左に傾いて居るので蠻の横這宜敷しく一歩々々傳つて渉る。三十分も行くとレールを見る、もう歸つた氣がして一度に疲れが出る、それにしても道もつけ難い此の奥まで良くもレールを延したものと感心する、然し大半は落石に埋れて居りこれは下流の中ノ俣澤へ移行する由、廣河原まで降ると先年コグラ谷へ入つた思出の懐しさにワザ〳〵吊橋を往復して見る。中ノ俣澤事務所の飯場で飯をたき濁酒の御馳走になりやつと人心地ついた思ひだ。其の頃より又降り出し後には豪雨となり頭から天幕を被つて歩くが駄目、双六橋で滿員のバスに無理矢理詰め込む。

附記

双六谷は少々嘗めた感あり意外の難行でした。而し黒部の如く電力資本の手入もなく昔乍らの溪谷美を滿喫しました。單獨行なので必然的に荷物は重く物資不自由の昨今食料に於ても相當重量となり山を始めて二十年恐らく一番苦しい山行を味はひました。黒部奥は岩魚の本場であの邊でゆつくり生活したいものです。烏帽子から入るより槍經由の方樂かと思ひます。祖父澤出合に天幕を張れば岩魚釣に山歩きに一週間位は恐らく退窟しないと思ひます。双六谷のガソリンカーは廣河原まで通じて居る様ですが一般登山者の利にはならぬ様子です、打込小屋は餘り快適なものではありません水は少し降るとあります。蓮華澤出合邊りに避難小屋の欲しいものです。時節柄かそれとも時季尚早か登山者も少なく四組に遭つた丈でした。

(十八年七月三十日)



會員通信

淺春に五龍へ

沼倉寛二郎

確か一昨年の四月雄山の頂きに立つた時だと思ふ、あれが鹿島槍で次が五龍でと指呼したら誰か素晴しい山稜だナアとすつかり感嘆それ以來何時となしに五龍へ行かうと言ふ事になつてしまつた、期待した今冬の私共の計劃が凡て惡天候に阻れ失敗續きで少からず腐つてゐた爲め、せめて五龍丈けでもと言ふ惡しい程の闘志が燃へて四月二日富山を出發松本に一泊、三日十一時頃神城を發つた、俗に壁とか言はれる巨岩の上で脚光を浴びながら晝食を攝る、遠見小舍には思つたより早く神城から三時間で入る事が出來た、小憩後ザラ雪で迚も氣持のいゝスキーを樂み明日への歓びを心に畫きながら小舍に歸つた、その頃からチラ〳〵と雪が降り始め六時すぎからは風さへ加つて夜中は强暴な烈風雨と變り吒んに咆哮し續き今にも小舍が吹き飛びそうである、又しても私共の計劃が畫餅となりそうで仲々眠れない、明くれば四日暴風雨は却つて猛るばかり何時止むともない、滯在と決め心を落ちつける午後になつても靜まりそうもないので二三の人が下山する様だ、腐つた氣持を何とか惹き立て様と努めるが却つて滅入るばかりである、慰みにと地圖を擴げてアイトを吒りたてゝ八時過床に就いた、が氣になるので二時頃起きて見る、雨はやむだらしいが香しくない生暖い南風の雲模様だ、半ば諦めて又床に入つたがどうしても蟲が納りそうもない、五時頃起床どうやら午前中は保ちそうな氣配、行ける所迄と言ふ事で準備をする「十時頃迄もてば天候は恢復するでせうョ」との下川氏の言葉に送られ小舍(七・三〇)からアイゼンを履いて重苦しい出發であつた、空は一面雲に蔽はれてゐたが小遠見を過ぎる頃から次第に雲が薄く切れ

て、大遠見にさしかゝる頃は全く奇蹟的にも快晴と激變一行を無性に喜ばせる、小遠見と大遠見の鞍部でアイゼンをスキーに替へる頃は本當に幸福であつた。純白な白岳、今にも咆哮しそうな奇岩の五龍左に鋭く天を衝いてる鹿島槍と靜寂そのものゝカクネ里右へ唐松に續いてなだらかな山浪を展べて白馬は流石にこの地の王者に相應しくドツシリとした風格は四邊を壓して素適な冬山の氣分を味せて呉れるに充分だつた。餘り深山でもないのにこんなにも美しい冬の山々を眺められると言ふ其れ丈けでも何と幸福な事だらう、天候恢復に連れ嬉しかつた事は何んと言つても粉雪に惠れ、白岳下デポ迄の愉しい辷りであつた事だ、燒つく様な陽下で晝食を攝り再び鼓よりアイゼンを履いて新雪に埋つた白岳へ登る、白岳から見る五龍への急斜面は深雪で苦勞したが思つたより樂にトラバスして岩場迄來てしまつた、こゝから愼重にピツケルとアイゼンの齒を利かして登攀敢行は充分とは言へない迄も氷雪と岩へのスリルを味ふ事が出來た、頂きに近い急峻面は小雪崩が今にも流れそうだつたがこれもさして危險はなく頂上に立つ歡びを得た、日頃眺め親むでゐた劍、立山の崇高な後姿を眺めた時の感激は終生忘れ得ぬ山の思出となる事であらう、北部山岳の雄劍の峻鋭な姿は言ふに及ず藥師遠く槍穗高と北の精鋭づらりと白銀の裝を凝してる、直ぐ隣りの鹿島槍は研ぎ澄まされた刃物の様に天空に聳え立つ凄壯な姿には誰も聲を發するものもなく神祕の境に立ち竦むだ形だつた、これ等優秀な山容は山男の腦裡に强く印象づけずには置かないであらうし又たまらない魅力の對照である、頂上で國民儀禮を濟してから紀念の寫眞を撮り後髪を引かれる思ひで別れを告げ、歡喜を抑へつゝ往路其儘を選び白岳下スキーデポ迄一氣に下り、鼓から又快適な滑降で小遠見まで堪能する事が出來た、小舍で小憩後暮れかゝつた神城へ下山、やつと日頃の願望が達せられた、其の悦びを神城の宿で更めて祝ひ合つた。

（昭和十八年五月一日記）

參考記錄

第一日（三日）

神城一一・一五—遠見小舍一四・二〇

第三日（五日）

小舍七・三〇—小遠見八・五〇—キャンプ地九・二五—大遠見九・五〇—スキーデポ（白岳下）一〇・〇五—一〇・五〇（晝食）—白岳頂上一一・三五—五龍頂上一三・三〇—白岳一四・一〇—スキーデポ一四・三五—一五・一〇—小舍一六・四〇—一七・五〇—神城一九・一〇

（小舍—神城の歸路故障の爲め意外の時間を要す）

蒙疆より

北田正三

決戰下の岳友諸兄の御健康を遙かに百靈廟の北西より星の夜の駱駝の背に祈ります。大草地も全く百花滿開の極樂世界ですが青い雲なき空よりの惡魔、砂漠の彼方よりする赤奴。想ひは北海の孤島に戰ふ望月岳兄に泣けて仕方がありません。西北は斷じて吾人岳人の面目にかけて守ります。生きて逢へる日の喜び切也と。

（六月二十日　シラムレン廟の北にて）

北支泰山より

蒙古の旅より中原に歸り新綠の泰山に三日路の登行。登山靴を脫いで底厚の支那靴に更える賢明さを味ふ程に石山にて閉口頓首。遙かに岳友諸兄の健康を祈りつゝ。

（七月一日　北支山東泰山縣泰山にて）

アリューシャン通信（六月）

望月達夫

拜復三月十一日附御便り大變なつかしく拜見しました。同時に會報一二〇號一二一號到着之亦うれしく拜讀いたしました。既に熱田島のニュースも御承知のことゝ存じますが最近當方面の狀況も頓に變化をしつゝあります。愈々御奉公にいそしむの時も眞近かではないかと既に深い覺悟をいたしてをります。幸ひ身體至極元氣、上陸以來病氣には一度もかゝりませんので御安心願ひます。

六月に入つて鳴神にも春が訪れキスカ富士の雪も麓の方は殆どなくなり海岸に近い草地には一齊に名も知れぬ草花が育ち花をつけてをります。天候も大體濃霧の日が多くて太陽を仰ぐのも珍しいことです。併し短夜長日で太陽は北東より昇り北西に沒します。濃霧の日には魚貝、草芽をとつて食用に供し現地補給を少しでもやつてをりま。

慰安方面は依然進捗せず、內地から來る便りが一番たのしみです。新聞は留守宅から續けて送つてもらひ、只今「朝日」は五月十日迄見てをり雜誌類も一、二ケ月おくれたのなら大體來てをります。當方面への小包がきかないので少しまとまつた書物は來ませんが、それでもなんかかんか手に入つて最近讀んだものは次の通りです。

大岡龍男「妻を描く」、橫光「鷄園」、藤村「櫻の實の熟する時」ロマン・ロラン、プーシキン、シュミトボンの岩波文庫物、ブールジエ「死」、ミラー「ベーリング海の霧と人」、スタンダール「ヴアニナ、ヴアニニ」等其他中央公論、文藝春秋等で、中央公論の藤村や潤一郎の新しい小說又確か文藝春秋に出てゐた「富士と水銀」は中々良いと思ひました。文藝春秋に出る三好氏の詩には實に良いのがありますね。內地でも相當に本が出てゐる事を新聞の廣告等で見てゐますが、之はと思ふものは中々手に入らぬ由、只今は見ることも出來ぬ故廣告の切抜きなど手帖にはさんで僅にたのしんでをります。

足立氏「西域史の研究」が出た由。之は豫てから小生も期待してゐたもの「法顯傳」と併讀すれば得る處多いでせう。小生の氣のついた之はと思ふもの左の通り、石濱純太郎「東洋學の話」、ムツタア「十九世紀佛國繪畫史」、エイ・リイグル「美術樣式論」、小宮豐隆「人と作品」、ベルグ「カムチヤツカ發見とベーリング探檢」、大西

克禮「萬葉集の自然感情」、桑原武夫「事實と創作」、スウエン・ヘデイン「彷徨へる湖」、鳥居龍藏「黑龍江と北樺太」其他登山、探檢でも氣の付いたものも少々ありますが、どうも大したものではなさ相です。

會報誌上に依れば槇理事、沼井評議員等陣頭に立つて大いに張切つて居られる御樣子にて大變嬉しく思ひます。沼井さんの「小集會に就て」一面白く拜見、貴方の圖書紹介の御意見も大賛成、大いに刀を入れて下さい。小生もブックレヴュウには今迄力を入れた心算です。登山年譜も沼井さんの御努力で逐次形を整へてゐる樣子結構です。遠く離れてゐると小集會や役員會の記事が之亦至極興味をひきます。詳細が出てゐて有難い事です。藤島さんの「古書の評價」如何にも同氏らしい筆致に久々に接し愉快でした。Innermost Asia が一萬元とはいくら物價の高い北京でもちと驚きました。併し之丈は山岳會あたりにはしいものです。その他 Burdsall の Conquest of Minya Gongkar は一寸垂涎おく能はざるものです。此の方面の事を一時相當しらべたので特に感が深いのですが右の書物ははじめて目にふれたので少ししやくにもさわりました。

……すつかり覺悟をきめて居ますので至極心情靜謐です。人事を盡して天命を待つと云つた處でせう。醜の御楯として何處迄も頑張ります。

木暮會長はじめ各位によろしく。

……

敬具

六月十一日夜

二伸　草花を少し入れました。アリユーシャンの香りを多少とも味つて下さい。（檢閲濟）

右の通信は私宛のものですが、同君の消息を待つておいでの方々が多いので、殆ど全文を掲載致しました。望月君の了解を得てゐませんが、御許しを願ひたいと存じます。會へも又他の方々の處へも度々たよりがあり、昨年十二月末會宛への通信は會報第一二一號に掲載されております。同封の押花は二つでしたが、花のことを一向知らないものですから、手許にあつた、ワイルド・フラワアズ・オフ・カシュミル」とかニュウファウンドランドとかを開いて似た花をさがしました處 Potentilla Curviseta, Trollius Acaulis, Ranunculus acris などといふのに似ておりました。イバラやウマノアシガタの種類のやうですが花の色はどちらも黃色です。この花と共にアリユーシャンの見知らぬ風景も目に浮び、草や苔や霧の香りさへも感じたことでした。（田邊主計）

上越の旅より

（六月末）

中司文夫

○

荒川の放水路なる河原邊は
野草茂りて只の草原

梅雨空に遠く煙りて山裾を
しづかに曳けり赤城嶺ならん

明日の山あの岩かどに立ちなほり朝日、笠見んパイプ喰へて

殘雪の深さ幾何西黑を
つめて登らん雪渓の道

キスカ島守る吾友鳴神の
いたゞき見つゝ
氣負ひ居るならん

吹雪く夜を共に語りし山小屋に
今宵は遙か君をしのばん

何日の日か共に登らん耳二つ
武運永かれキスカの友よ

（以上車中）

○

本年は殘雪多く出合より
しばらくにして雪渓を踏めり

山風に雲霧散して谷間より
仰げば氣高し耳二つ山

鐵砲登り危き雪の道よぎり
手以て攀ぢゆく尾根迄の道

嶺通ふ風におのゝく雪割草
その純潔のあはれ愛しき

嚴然たる頂き二つ其の間に
深く剩めりマヂカの澤は

雪の下の小さく色濃き群落に
蜜蜂集ふ花のかなしき

はひまつの香りの中に
しやくなげの
花にうもれてひるげしたゝむ

ぶなの大木の雪崩に
落ちて雪渓の
上に芽ぶけるいかにも哀れ

（以上谷川岳）

○

午下り車軸を流す雨來りぬ
よくぞ苗場に我は行かざりし

蝮らの住むてふ河原の
むくら生に
朝食取りしが安からざりき

（清津川）

久にみる毛猛三山のなつかしき
十年まへ我、初登攀の山

（小出）

集會記事

○第四回有志懇談會

昭和十八年七月十一日。清水谷皆香園に於て

一、登山と食糧　織内　信彦氏

一、同　右　佐藤テル子氏

會場の都合で六月末開會豫定が一旬餘のびて行はれた。今回は特に晝辨當持參の催し、都心却つて綠濃い環境、感じのよい奥の一室で、十二時からアルマイト箱の蓋があけられ、時局向のつましい食事と懇談が始まつた。

中心話題は、織内氏の分は理論的に、佐藤氏の分は實際的に重點を置かれたが、共に貴重な御研究の一端を洩らされ、且又戰時道義感に滿ちた立派なもので、少數の有志だけが拜聽するには勿體ないものであつた。尚、懇談の終に冠氏は代表風景地・森林の最近情勢の推移を紹介されて一同の注意を喚起された。

本會も第四回に至つて當初意圖とせる內容と形式に向上したやうに思はれる。かくて第一次世話人の一年に及ぶ責任も稍果せたものと存じ、玆に次回以後の世話人各位を指名御紹介し、本日の演者・參會者並に發起以來の先輩同志の

方々に厚く謝意を表する次第である。

參會者芳名(順序不同)

荒井道太郎、柴山登茂次、木村鎭吉、川喜田壯太郎、冠松次郎、野口末延、佐藤テル、初見一雄、織内信彦、吉田竹志、田邊主計、岡田寧一、塚本繁松、槇有恒、沼井鐵太郎(世話人)、神谷榮(同)、岩永信雄(同)、以上十七氏。

第五回豫定　九月下旬　世話人(交替)田邊主計、野口末延、大熊保夫、以上三氏。(沼井)

○關西支部小集會

昭和十八年七月十八日　於清交社

講演　峽谷と探檢

本會理事　冠　松次郎氏

黒部開拓の苦勞に生涯を捧げられたともいふべき冠氏を迎へて久振りの小集會を右の如き演題で開催した。時日に餘裕がなかつた上に近頃は夜間の會合に種々の支障があるので初めて晝間の案内をしてみたが案ずるより生むが易しで約三十名の集り。それに時間がゆつくりしたので冠氏にはお氣の毒ではあつたが峽谷と探檢の一般論から黒部に關する相當詳しいお話を願ひ得又講演後の座談會でも溌溂たる質問などがとび出し四時間に及ぶ講演(一時—四時)座談會(四時—五時)も充分有意義に利用された事は幹事の秘かに喜びとする處であつた。

座談會終了後涼しい清交社より朝日ビル十階の非凉閣(?)「北洋」に移つて有志晩餐會を開き、茲でも丸で親子兄弟が久振りに食卓を圍んだやうな賑やかさに暑さも吹きとばし、少量の麥酒に健啖博識振りを發揮、宮崎武夫氏の飛入りもあつて、快き夕風の川柳に戯れる頃盛會裡に閉會した。終りに始終御高教を頂いた冠氏に厚く感謝を捧ぐ。(富田記)

講演會及晩餐會出席者(順不同)

冠　松次郎　小原　邦雄
青井竹三郎　關根　吉郎
金谷　伊祐　久保田春雄
佐藤　治郎　西岡　一雄
藤井　一雄　梶原　信男
宮崎　武夫　鈴木清三郎
栗飯原健三　富田　健一

講演會出席者

林　利春　法貴　六衛
島田眞之介　淺井　東一
影山　寅造　嶋越　恒夫
渡邊　修治　伊藤　俊夫
外　五　名

○關西支部野外研究會

昭和十八年五月九日(日曜)

研究題目　山岳スケッチのコツ

講師　評議員　榎谷徹藏氏

昭和十六年八月に行つた研究會で榎谷評議員の山とスケッチと題するお話があつた。その時是非一度近くの山へ出かけて實地に指導して頂きたいとの會員の聲が多かつたのが漸く實現して新緑爽かな五月の日曜、輕裝の内にもいざといふ時の心構へよろしく和服にモンペの西岡老を始め巻脚胖、ニツカーとそれ〴〵のいでたちで寶塚驛に集合した。急用で來られぬ數名の人を殘して武田尾に移動、和やかな談笑を山に谷に吹きとばしつゝ綠に包まれた旗亭に根據をおき附近の格好の場所より山を描き谷を寫し或ひは人の構圖の眞似をしてかいたりしたのはよいがさて講師に見せて修正してもらふ段になると却て謙讓家揃ひ!! 講師より適切な批評指導は夕刻迄つゞいた。珍しく會員打揃つて郊外に出た事は氣分一轉實に樂しく、頗張る握り飯も格別うまい。晝食前に裏山を登つて藪くぐりで谷に下り遡上して白龍瀧で汗を乾した時、つく〴〵二三日こうした氣樂な山歩きがしたいなあと感ずるのであつた。(富田記)

當日の出席者左の通り(順不同)

榎谷徹藏　小原邦雄　木藤精一郎
近藤眞雄　西岡一雄　島田眞之介
金谷伊祐　和田卯三雄　樋口進一郎
富田健一　外二名

會務報告

常務役員會報告

七月二十一日午後七時於事務所

開催

出席者　槇、木村、沼井、茨木、早川、小原、倉松、杉本、塚本、委任—木暮、鳥山、吉澤、織内、谷口、交野、松井、津田、栗飯原、富田、榎谷、中原、冠、中村、田邊

議長　槇理事

一、定款改訂許可ニ關スル件

サキニ申請シアル會費變更ニ關スル定款改訂ノ件ハ近日當局ヨリ許可アル模樣ニ付定款第二十六條ニヨリ左記ノ如キ規定ヲ作成シ、定款改訂許可アリ次第直ニ實施スルコトトス

會費納付ニ關スル規定

第一條　通常會費(年額十圓)ハ毎年四月末日マデニ納付スベキモノトス

但シ半額ヅツ年二回ニ分納スルコトヲ妨ゲズ

右ノ場合ハ前期ハ四月末日マデ後期ハ十月末日マデニ納付スベキモノトス

一、登山探檢ニ關スル食糧ノ調査研究ニ關スル件

原則トシテ賛成ナルモ具體案ニツイテハ沼井評議員ニ立案ヲ依頼スルコト

一、八月中ノ圖書室開室日ノ件

火、木曜日　午後五時—八時

土曜日　午後一時—五時

一、入會申込者九名承認

以　上

會員消息

今井田研二郎氏（海務院課長）
東北方面査察使隨行として東北々海道方面に出張

中村一氏（慶大學生）　海軍航空豫備學生に志願

木原均氏（京大農學部教授）　一粒小麥の早成實驗に成功の由

冠松次郎氏（理事）　七月中旬より下旬にかけ關西方面に出張、關西支部小集會にて講演

月原俊二氏　出征中の同氏宛先は比島派遣一六〇〇部隊ノ八と變更の由

桑原武夫氏（大阪高校教授）　著書「事實と創作」創元社より刊行

永原輝雄氏　三井物産青島支店長代理に轉任

宮崎武夫氏　著書「蒙古横斷」を朋文堂より刊行

終身會員に變更

藤島源太郎（會員番號一〇三三番）

右昭和十八年度より終身會員に變更

會員章再交付

二二五四番（舊二二四二番）
只松利夫

事務所便り

★今年の夏は昨年に較べれば相當にしのぎよいと思つて居りましたが、矢張其時が來たと見えて最近大變暑くなりました。暑い時には自然清流を思ひ、高山の涼氣を思ひます。

★出版物の後れる事は近頃は當り前の事みたいになりましたが、それを少しでも早くしたいと努力して見ても中々うまく行きません。山岳もとう〳〵八月になつてしまひましたが、これだけはこの會報と共にお屆け出來る豫定であります。

★しかし山日記の事を思ふと憂鬱になるばかりです。今日になつても未だに發賣日を發行所では明言してくれないのです。それについて豫約註文の方へは別に葉書を差上げました。

★先號の會報を七月中にお屆け出來なかつたのは矢張り印刷が後れた爲でした。でもこの方は月を越しても五日ばかりでしたからまだよい方でせう。それにしても五頁と八頁の入れ違ひは大變なしくぢりでした。熟練工の人が點呼だかに行つてゐる間に起つた事件なのださうです。紙だけ損をすればいいのだからやり直してくれと言つたのですがその時はもう版をこわした後だといふので我慢をしていただく事になりました。前例のない事なので恐縮の至りです。

★近く小集會なり講演會なりを開きたいのですが、中々適當な題目と人が見當らず集會係も困つて居ります。會員諸氏で、かういふ人からこんな話を聞きたいといふやうな事がありましたら是非どうぞ御希望をお知らせ下さい。出來るだけ實現出來るように努めます。

★會費變更についての定款改訂は最の會員總會で決議され、早速當局に認可申請を致しました處、直に許可する旨の諒解を得たのですが、さて許可書類の作成といふ段で結局時間を喰つてしまひました。しかしいよ〳〵近日許可書が到着するものと思はれます。その際は全會員にその旨を御通知致しますが、時期はこの會報と前後する事と思はれます。既に本年度會費を六圓御納入濟の方は追加金四圓を、未だ御納入なき方は全額十圓を何卒御納入の程を特に御願ひ致します。（八月五日　塚本記）

★本號を印刷所へ渡してから二年振で黒薙川をたづねて見ました。谷には何の變りもありませんでしたが、人工の手はいよ〳〵奥深く入りこむ樣子で、北又を渡渉し作ら柳又の合流點迄下りますと、其處は今迄のやうな幽寂な自然境とは打つて變り、ダイナマイトの音石屑の石を打つ槌の音、多數の土工と飯場の炊煙、數間幅の道路、と言つた具合で、變り方の劇しさに驚きました。（黒部本流の水電工事の頃も同じでしたが。）

★山を下つて下界の樣子は如何にと新聞を見ますと、其處で發見したものはキスカ島の轉進記事でした。本誌と因緣深い望月氏の武運あ强さに嬉し泣き致しました。そして本日同君から通信があり無事で新任務に服し居るとの事であります。會員諸氏にも喜んでいただきたいと存じます。（八月三十日）

會報原稿要綱

△締切　毎月二十日
△用紙　十五字詰のこと
△長さ　隨意なれ共餘り長いものは會報には不向　但し分載出來るものなら差支へなし
△右御諒承の上續々御寄稿乞ふ。

編輯後記

會報の編輯を夜の時間でやつてゐますが、この頃は暑さの上に蚊がゐて困ります。先日自分の一生は鼠と戰つて來たやうなものだといふ話を讀みましたが、私の一年の三分一(六月—九月)も蚊と戰つてゐる樣なものです。蚊取り線香といふものを買へれば買つて焚くより他に今の所方法がないのですが、これは人畜に無害とあるにも拘らず眼は痛くなり頭はぼんやりして來るのですから決して無害とは言へません。その割に蚊の方は平氣らしいです。かういふ方面の科學は一向進まぬと見えます。鼠が確かに人語を解するに相違ないと思はれるやうにこの小さな虫もこちらの思つてゐることをちやんと見ぬいて先まわりをするやうです。

(田邊主計)

昭和十八年八月十三日印刷納本
昭和十八年八月十五日發行
頒價 ㊙ 二十錢
日本山岳會內
編輯者 田邊主計
發行者 塚本繁松
東京都芝區琴平町一(不二屋ビル)
發行所 社團法人 日本山岳會
電(芝)一六四九
振替東京四八二九
會員番號 二二二〇三三
東京都神田區佐久間町三ノ三七
印刷所 株式會社 文唱堂印刷所
電話下谷(33)六七九五
會員番號 東東三三一七
東京都神田區淡路町
配給元 日本出版配給株式會社

本邦唯一の山岳雜誌大增刷斷行

山と溪谷

年6回奇數月刊行　一部 70. 送料 08 年極 4.20
第 81 號「東北の山」特輯九月上旬發賣豫定

號を重ねること八十、十五年の歲月を歩み來つた山と溪谷は、大東亞決戰下唯一の山岳雜誌として生き殘る榮譽を荷ひ、且用紙增配の特典を得責任の重且大を感じ、此處に戰ふ祖國岳界の輝く言論機關として奮起を誓ふものである。用紙增配に伴ひ大增刷斷行に付、從來入手難の各位はこの際至急全國各書店へ豫約申込まれんことをお願ひする。

川崎隆章編

岳(たけ)

序文・柳田國男　題簽・木暮理太郎　表裝・正宗得三郎　扉見返・中村清太郎　油彩畫・岡田三郎助　墨繪・牧野富太郎

待望の名家山岳隨筆集、汲めども盡きぬ山への滋味、祖國が誇る幽山深谷の總ゆる相をこの高貴の著は秘む

(九月五日發賣決定)
頒價 3.80　送料 20

塚本閤治著

槍ケ岳へ

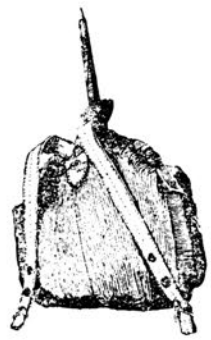
中部山岳の盟主槍ケ岳とそれを繞る山容を餘すなく著者のカメラアイは活寫した。記事下平廣惠(總論、地質、植物、動物、交通、山へ入る路地形、溪谷、森林、溫泉、傳說、各コース案內(塚本氏筆油彩畫口繪、略圖四葉入)

頒價 2.50　送料 12

近刊
山と溪谷社編「全國山の湯旅」　藤木九三著「登拜頌」
川崎隆章編著「大東亞圈の山」　安齋徹著「東北の山」
山と溪谷社編「山岳辭典」　中村清太郎著「山岳渴仰」

東京都芝區田村町6—4　**山と溪谷社**　電話(芝)543番　振替東京 60299番

キスリング型(E式)
ルックザック
御手元にある布地御持參になれば
御調製申上げます



山とスキー具專門
東都最古の專門店
東京都神田區神保町三ノ一(專修大學電停前)
片桐テント登山具店
電話九段(33)三二一〇番
振替口座東京九一一八四番
店主 片桐盛之助